

## 50 回特別記念講演

1 日目 10月16日(木) 14:10～14:40  
第1会場(市民会館崇城大学ホール 1F)

### 日本赤十字社医学会の50年を紐解く

富田 博樹(日本赤十字社医学会理事長・日本赤十字社事業局長)

座長 若杉 健三(大分赤十字病院 院長)

## 50 回特別記念講演

# 日本赤十字社医学会の 50 年を紐解く



日本赤十字社医学会理事長・日本赤十字社事業局長  
富田 博樹

### 【略歴】

- 1973 年 3 月 東京医科歯科大学 医学部医学科卒業
- 1973 年 10 月 武蔵野赤十字病院 脳神経外科
- 1977 年 7 月 ニューヨーク大学 脳外科レジデント
- 1979 年 9 月 東京医科歯科大学脳外科 助手
- 1984 年 7 月 武蔵野赤十字病院脳神経外科 副部長
- 1994 年 4 月 武蔵野赤十字病院救急部 部長
- 2007 年 7 月 武蔵野赤十字病院 副院長
- 2008 年 1 月 武蔵野赤十字病院 院長
- 2012 年 4 月 日本赤十字社 事業局長（現在に至る）

### 【他現職】

- 東京医科歯科大学医学部脳神経外科 臨床教授
- 日本臨床倫理学会 副理事長
- 日本赤十字社厚生年金基金 理事・代議員
- 学校法人日本赤十字学園 常務理事

1964年に創設された日本赤十字社医学会が本年度で50周年を迎え、その記念すべき第50回総会が日本赤十字社発祥の地である熊本で開かれることは、誠に意義深いことである。

赤十字医学会誕生については日本赤十字社社史稿第7巻に次のような記載がある。

『日本赤十字社では全国に100を越える医療施設を運営しており、それらの施設に勤務する医師、歯科医師及び薬剤師の数は、すでに、2,100名余名の多きに達しているにもかかわらず、これらの職員が一堂に会し、その持てる知識と技術を相互に交換し、新しい医学並びに薬学を修得する機会が未だになく、関係者の間には、前々から赤十字医学会の設置を希望する声があった。日本赤十字社としてもその必要性を認め、日本赤十字社医学会を結成することになり、その第一回総会が昭和39年(1964年)11月21日、東京麹町の東條会館で開かれた。』

第一回総会会長は日赤中央病院(現医療センター)長谷川敏雄院長であった。その抄録集は日赤医学第17巻3号“第1回日本赤十字社医学会総会特集号”として発刊されている。内容を見てみると、長崎原爆病院長、横田素一郎の「原爆症のその後について」と題する特別講演、並びに東京大学教授、佐野圭司氏の「脳の外傷について」と題する特別講演があり、そのあと大阪赤十字病院、菊池武彦の司会により、講師に中央血液銀行所長、村上省三ほか二名の講師を迎えて、「血清肝炎について」をテーマにシンポジウムが行われた。いずれも当時の医療界で最も注目されていた分野であったと思われる。抄録を読むと先人たちが未開の地へ踏み込んでいく様子をうかがうことができる。その後も、医学、医療の発展に従って、血液、感染、ガン、免疫、成人病などの疾患に関する講演と共に、医療事故、医療システム論に拡がり、さらに音楽、俳句、動物から見た人間論など幅広い文化を包括する講演へと発展している。日本赤十字社が血液事業部を有することから、“血液”の分野での優れた講演や研究も目立つ。その後学会の規模も拡大し、1998年には看護師が、2002年には全職種が参加し、文字通りの日本赤十字社医学会となった。特筆すべきは2002年の第38回総会(横浜赤十字病院担当)において当時副社長であられた近衛忠輝社長による特別講演『救援活動におけるわが赤十字社の役割』が行われたことである。この講演は東日本大震災において展開した日本赤十字社の大規模で長期にわたる救護支援活動の実践の礎となった。

この50年で赤十字病院グループは大きく発展してきた。人道(ヒューマニズム)に基づく博愛・公平・奉仕の理念のもとに医療を中心とした社会的活動を行っており、職員数は5万4千人に達し、医業収益は年間1兆円に近付き、その活動内容は、地域医療、公的医療(救急、僻地)、国内災害救護、国際活動、看護師養成と広く、これらを確実に実践してきた。地域の中核病院としての良質な医療を提供し、災害時の救護活動およびその後の復興支援、国際救護支援活動、など他の病院グループの追従を許さない活動で、国民からの信頼に答えてきた。

世界最速のスピードで少子高齢化社会に突入する我が国において、各都道府県には人々が安心して暮らせる地域づくりをめざした地域医療ビジョン策定を求められている。各病院はそれぞれの地域で自病院の役割を再確認し、地域の医療および介護・福祉と密接な協力関係を結び、地域から尊敬される病院であり続けることを願っている。